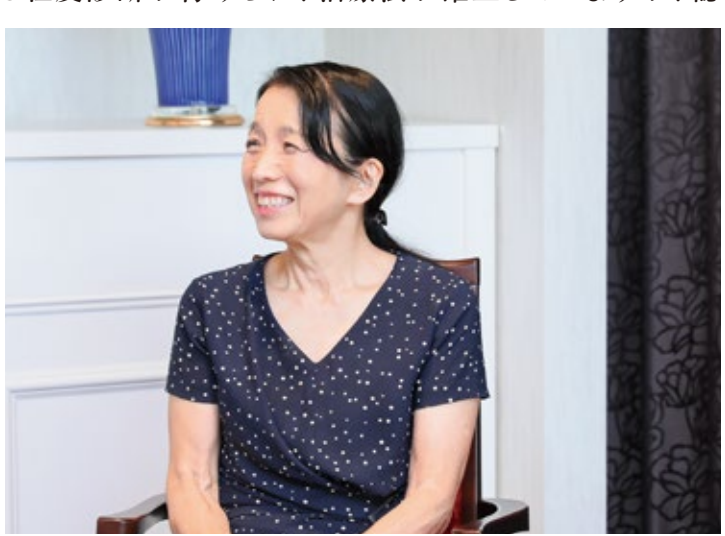


認知症は100人いれば、100通り。(阿久根)

- 阿久根** 岡博子先生は豊泉家グループの一員である、ほうせんか病院の理事長であり、現場では院長を務められている先生です。豊泉家グループでは私は社会福祉法人担当で、岡先生は医療法人担当。現場同士のつながりはあるのですが、理事長同士でお話をする機会って、実はあまりないんですよね。世の中が高齢社会になってきて、ほうせんか病院も高齢者の方が多く、認知症の方もたくさんおられると思います。これを機に、長くそういった患者様を見てこられた先生と、ゆっくりお話ができればと思い、対談のお相手をお願いいたしました。
- 岡理事長** 今は諸事情で変わりましたが、私は以前、阿久根理事長の主治医も務めさせていただいてましたね。患者様として関わっていた当時は、「早く瘦せてくれへんかなあ。」と思っていましたよ(笑)。
- 阿久根** 毎回、言われていましたね(笑)。ところで、ほうせんか病院に入院されている患者様で、認知症を有されている方は多くいらっしゃるのですか。
- 岡理事長** ほとんど、そうですね。病床数は220床ありまして、常時200人くらいの患者様が入院されています。多くが80～100歳という高齢の方で、平均年齢は84～85歳くらい。合併症になって寝たきりになっている方が多いですし、お話が出来ても意思疎通が上手くいかない、なにを言っても覚えていただけない。そういう方が非常に多いので、たぶん半数くらいは認知症を発症されているのではないかなと思います。
- 阿久根** 医療の現場では今後、確実に増える認知症の問題について、どう考えられていますか。
- 岡理事長** こう言っても身もふたもないかもしれませんが、現状では仕方がないですね。今のところ、お薬で予防はできません。進行を防ぐ薬は出ていますが、効いているなど実感はできないので、iPS細胞を用いたものなど研究が進んでいるようですが、もっと画期的なお薬が出るまでは、難しいでしょうね。
- 阿久根** そうですか。それならば、これからは更に医療と介護それぞれの現場での結びつきを深める必要がありますね。認知症は一つの病気ですので、医療による的確な診断と的確なケアを組み合わせていく。そうすることで、認知症をお持ちの方々のQOLを高めていくべきでしょう。それにひと言で認知症と言っても、現れる症状は様々ですね。
- 岡理事長** 認知症の分類は様々ありますね。脳のどの部分が萎縮しているかによって、記憶障害が出たり、性格が変わって過激になるとか。こちらがいくら上手く働きかけをしても、思うようにいかない場合もありますね。
- 阿久根** 認知症は100人いたられば、本当に100通りだと感じます。他の病気であれば、ある程度診断が付けられ、治療法が確立していますが、認知症は多少お薬で改善することは出来ても、完治させる治療は難しい。根本的な治療薬はありませんね。
- 岡理事長** 認知症に関してお薬は、お守りみたいなところもありますね。飲んでいるから効いているのか、飲まなかったらどうなのかはわからないんですよね。
- 阿久根** 中核症状に効くお薬は極わずかですが、あとは周辺症状を少しでも穏やかにするとか、逆に元気を出させるとか、そういうお薬の調整ですね。やはり今はますます、特に認知症においては、医療と介護の連携が大事だと思います。それと認知症は意外と、適切な診断にまでいかないことがあるんですね。先生に診てもらわなければ、家族や周りの方からの「あの人はボケている。」の評価で終わったりしますので。今後は、ほうせんか病院でも認知症の診断をお願いできればと思っています。



『認知症イノベーション』は現場で体験したことが書かれているからこそ、響く人もいます(岡理事長)

- 岡理事長** 豊泉家には、私の母が同居させていただいているご縁もあります。母は父を亡くしてから、独り暮らしをしていましたが、段々と認知症が進行して、このまま一人で居させたら危険だと思い、同居させていただきました。
- 阿久根** ケアハウスに仲の良いお友達がいらっちゃって、お元気に、楽しそうにお過ごしいただいていますよ。
- 岡理事長** 入居前はやはりお食事もちょうど摂れていなかったようで、今思えば、栄養失調に近い状態だったと思うんです。だけど入居してからは24時間、温かく見守っていただけで、すごく元気になりました。実は入居しても、認知症がどんどん進行するのかと思っていたんです。精神科医の私の息子も、「これだけボケたら、もうだめやで。」と言っていました。父が亡くなって一人になってから、どんどん落ち込んでいくのだろうなと思っていたら、入居をきっかけに認知症の状態は横ばいになりました。もちろん、以前の状態に戻ることはありませんが、体力的にも良くなっていますね。
- 阿久根** お母様の状態が良くなったことで、医師として認知症への認識を改めたようなことはありましたか。
- 岡理事長** 認知症は周りのサポート次第で、どんどん進むものではないと感じました。病気とは思わず、性格ではないですけど、その人の個性だと思って付き合えばいいのかなという気がします。昔と比べると、「あんなに賢かったのに。しっかりしていたのに。」と、残念になる気持ちも多少はありますが、最近はこのが今の母の個性だと思って付き合っていくようにすればいいのかな、直してあげようとは思わないほうが良いかなと思うようになりました。
- 阿久根** この度出版いたしました「認知症イノベーション～一人ひとりの“パラダイス”を創造するケアメソッド～」にも書かせていただきましたが、認知症の方をケアするにあたっては、目の前で起こっていることを、事実として受け止めていくことが大事なんです(第五章「認知症ケアは、もっと楽しく幸せになる!」)。先生が仰られたように、ご家族の記憶には認知症になる前のお姿があるからこそ、変わっていく姿を見ていると切なさや寂しさを感じられるんです。だけどケアをしていく上では、今は今こうなんだと受け止めることが、支援者としてはすごく大事なことなんじゃないかなと思います。
- 岡理事長** 過去には、良かれと思っていたことが、相手の為になっていなかったようなこともありましたか。
- 阿久根** 過去を振り返ると、ケアする際に私たちの価値観を押し付けていたんだという事例はたくさんあります。在宅介護をされているご家族もそうでうけど、介護に熱心なご家族であればあるほど、昔の姿に戻したいという思いから過剰な行動をとられるのです。下手をすれば、虐待じゃないかと思うほどのことをされている方もいました。言われても理解できない、受け止められない認知症の方からすると、それは拷問でしかありません。
- 岡理事長** 病院にいる患者様でもそうです。ご家族がお食事を無理やり食べさせようとしていて、「それは危ないですから。」と言っても、「食べて元気にしたい。」と仰っていて、熱意はわかりますが、それが一線を超えたり、否定しているんだと気付かれました。そこから肺炎を起こしたり、窒息したりということも有り得ます。その度に注意するのですが、なかなか……。身近な人間が衰えていくのは、受け入れ難いですからね。
- 阿久根** 医療の現場でも、介護の現場で起こっているのと、同じようなことが起きているのですか。
- 岡理事長** そうですね。夜になると夜間講義(せんもう)といって大騒ぎする人もおられて、そういう方にどの程度のお薬を使うべきか考えます。安易に眠らせればいいというわけではなく、相手と向き合い、お話を聞いて、なぜそんなに不安になっているか。そういったことを一緒に考えることが大事ですね。
- 阿久根** 現場でのそのような対応は、看護師さんがされるのですか。
- 岡理事長** はい。夜間は看護師しかいませんので。
- 阿久根** これからは、看護師がケアワーカーの役割を担う部分も多くなりそうですね。
- 岡理事長** そうですね。みんな認知症に関する勉強もしていますし、対応出来るように努力しています。フェローたちには、阿久根理事長が書かれた本が大いに役に立ちそうです。
- 阿久根** ありがとうございます。ただ今回のこの本は、独特なものだと思っています。書いてあることは教科書にないような、現場から上がった話です。その為、専門職でしたら、読み進めるうちに混乱する方もいらっしゃるかもしれません。病院と介護施設とは環境が違うところもありますが、なにか困っていらっしゃったり、モヤモヤしている方にお読みいただければ、すっと腑に落ちる方もいれば、完全に否定する方もおられるのではないかなと思います。その反応も楽しみにしています。
- 岡理事長** 阿久根理事長がお書きになった本は、教科書的ではないかもしれませんが、教科書を作っている人たちは現場のことを知らない。理論だけで論文を書いたり、教科書を書いている先生方が多いのではないかなと感じます。だからこそ教科書的ではない、現場で体験したことが書かれているこの本の中身が、響く人もいるんじゃないかと思いました。
- 阿久根** 介護であるか看護であるかは関係なく、認知症と向き合っているご家族や専門職の方々は、本当に悩んでおられると思います。そういう方々の心に、入っていくのを届けたいという思いがあったんです。それと教科書で習ったことと、自分たちの経験で得たものは意外と違ったりするんですね。そういったことを結びつけられる一助になればという思いもあります。

認知症を有していても、認めてあげることが大事。肯定されるのは、気力の源(阿久根)

- 岡理事長** お世話になっているホームでは、アクティビティで計算の練習なんかもするようですね。母はそこで自分が一番だったとか、お習字を褒められたとか小学生みたいに喜んでます。
- 阿久根** やはり、認めてあげることが大事ですね。人間は否定されると、元気を失っていきます。認められたい褒められたい、肯定されるのは気力の源でもあるのじゃないかな。
- 岡理事長** 阿久根理事長が書かれた本の中にも、否定しないことが肝要であると書かれていますね(第四章「新メソッドが有効なワケ」)。
- 阿久根** はい。これは本に書いたエピソードですが、豊泉家にはお食事を手づかみでされる方が同居されています(第四章「新メソッドが有効なワケ」)。私たちがケアする側は箸やスプーンを使って食べるのが人間らしさだ、人間としての尊厳を大事にしないといけない。そう思って、手づかみされる度に「箸を持ちましょうね。」と直していたんです。ですがそういったケアをしていると、どんどん元気がなくなっていく、食欲もなくなり、それ以外の介護にも拒否反応が出るようになったんです。
- 岡理事長** そうなんですか。原因はなんだったのですか。
- 阿久根** 私たちも考えていました。それで、原点に置くべきは否定しないことじゃないかと思って、手づかみを肯定したんです。そうしたらすごくご飯を食べてくださるようになり、笑顔も明るくなって、食量と食べるスピードもとてもアップしたんです。私たちが当たり前だと思っている生活様式に、ある程度は導いて差し上げないといけない面はありますが、それが一線を越えたり、否定になるんだと気付かされました。否定されてばかりの人生を過ごしていると、段々と活気がなくなっていくんです。それらが、我々が当たり前に着いた新しい認知症ケアの出発点にあるものなんです。
- 岡理事長** なるほど。それは素晴らしいですね。
- 阿久根** これも本に書いたエピソードですが、入居者の中にロビーにあるソファで寝る方がいます(第三章「事例で見える『ラテラルケア(現実肯定支援)』」)。ベッドに誘導しても、またご自分の部屋から出て、ソファで寝る。それを繰り返していると、どんどん睡眠が出来なくなっていくんです。よくよく調べてみると、その方は元看護士さんで、夜勤もされてました。現代時代の夜勤時は、よくソファで寝ていたようなんです。ソファで寝ることを肯定すると、よく眠れるようになり、逆にベッドで寝る時間も増えたんです。最近では我々フェローの申し送りの時に、一緒に立っているんですよ。
- 岡理事長** 仕事をしている気分なんですか。
- 阿久根** そうなんです。その方の中では、後輩たちを見ていく気分になっているんじゃないかな。そうやって否定せずにいると、すごく元気に、穏やかになられました。このケアのやり方を理解しない人を見ると、なんというケアをしているんだと思われるかもしれません。ソファで寝させる、手づかみで食べさせる。なんてことをしているんだ。とお叱りを受けるかもしれませんが、我々の評価基準になるのは、入居者様の笑顔です。入居者様が笑顔になれるのであれば、それもアリかなと思っています。
- 岡理事長** 阿久根理事長のケアの方法は、病院での患者様の接し方に通じるものや参考に出来る部分がありますね。



今後は医療と介護の連携が、本当に大事になってくる(岡理事長)

- 阿久根** 医療と介護の連携プレーの一つの形は、医療で的確な診断をして、介護はそこから予測される症状を考慮しながらケアを組み立てていく。それとやはり、内服薬でのコントロールですね。認知症を有される方の中には暴れたり、ひどく落ち込んだり、様々な症状の方がおられます。お薬も併用しながら、ケアとコミュニケーションが大事だと思います。医療と介護の連携は、もうすでに必要とされていることが大事です。ほうせんか病院とはより強力に連携し、情報共有していくことが必要です。病院から老人ホーム、もうすでにから病院との行き来も増えています。
- 岡理事長** こちらで病状が落ち着かれた方で、お家に帰るのは難しい、受け入れるご家族がいる。あるいは仕事をされているなど、ご家族がお世話をされるのが難しいという場合は豊泉家のホームやサービスをご紹介します。そちらに入居される方もけっこういらっしゃいます。豊泉家で実際にお世話を起こして、一時的にこちらの病院に入ってくる方も、情報として共有させていただきます。これからは医療と介護の連携が、本当に大事になってきますね。
- 阿久根** 岡先生は医療に携わる者の立場から、今後は認知症にこうアプローチしていこう。こんな取り組みをしていこうという考えはおありですか。
- 岡理事長** 私の専門は消化器内科で、肝癌ガンとか肝硬変の人を見ていました。これから認知症を掘り下げて、具体的になかをするのは、難しいかもしれませんが、私の専門分野の話ですと、肝臓の機能が低下して起こる、肝性脳症という病気があります。認知症のように意識レベルが落ちておかしなことを言ったり、暴れたり、昏睡になったりします。だけど、これは治療で完璧に治ります。認知症とは全く別の病気ですが、すごく良くなるんです。認知症も早く、そうやって治る時代になればいいかなと思っています。
- 阿久根** 先生には医師という立場から、またご同居者のご家族という立場からも、今後も密に連携を図らせてください。その中で、色々共有することが多いと思います。また教えていただいたり、ご助言をお願いします。
- 岡理事長** ホームでの健康診断とかも強化したいですね。病気が見つかったら、こちらで出来ることもありますから。
- 阿久根** 病気に関することは、福祉福祉社のクリニックとほうせんか病院の両に期待しています。介護のことであれば私たちに声を掛けていただければ、ありがたいです。ご利用者にとって、豊泉家だから良かったと言ってもらえるような環境を、先生と力を合わせて創っていただきたいです。グループだからこそ出来ること、もっとたくさんあります。成相会の療養型医療と、福祉福祉社の介護を上手につなげれば、サービスの質がより高まります。我々ご安心いただけるまで病院が無かった点に弱みがありますが、今はほうせんか病院があることで安心しています。ご同居者も、そのご家族もご安心いただけると思いますので、引き続きよろしくお願ひします。
- 岡理事長** こちらこそ、お願いします。

